



古道が紡ぐ物語



聖徳太子ゆかりの筋違道（太子道）周辺を訪ねる②

～秦楽寺から終端・法起寺、法隆寺まで～

聖徳太子が一族とともに移り住んだ斑鳩と、推古天皇が執政した飛鳥とを直線的に結ぶ筋違道。藤原京建設や条里制による地割で大きく失われた部分はあるものの、田原本町付近から三宅町・安堵町、斑鳩町付近では比較的はっきりとその道筋が残っています。太子にまつわる伝説が多く残され、「太子道」とも呼ばれる筋違道沿道を、前回に引き続き秦楽寺から斑鳩まで訪ねます。

聖徳太子ゆかりの地が残る筋違道沿道（2）

■秦氏と関係の深い秦楽寺

秦河勝は、新羅系渡来氏族の長として聖徳太子に仕え、活躍した人物である。『日本書紀（以下『書紀』）』にも、蜂岡寺（現広隆寺、京都市右京区太秦）の建立、新羅からの使者の嚮導役（先に立って案内する）等、数々の活躍が記される。

筋違道にほど近い秦楽寺（磯城郡田原本町秦庄）もまた、河勝の建立と伝わる寺である。寺号の「秦楽」は秦氏の楽人という意味で、「神楽」にも通じ、能楽や猿楽とも関連が深い。

15世紀に世阿弥が著した能楽の理論書『風姿花伝』によれば、秦楽寺の門前に、河勝の末裔で能楽金春流の家元・金春家の屋敷があったという。同書は河勝を猿楽の祖として神格化しており、赤子のとき初瀬川の上流から壺に入って流れてきた、時の天皇の夢枕に立ち秦の始皇帝の生まれ変わりを名乗った等、河勝に関する伝説が記されている。

■桃太郎伝説発祥の地・法楽寺

筋違道沿いの法楽寺（田原本町黒田）は、寺伝によれば第7代孝霊天皇の黒田廬戸宮跡に太子が造立したものであるという。

また、同寺は「桃太郎伝説発祥の地」とも伝わる。桃太郎のモデルとされる孝霊天皇の皇子・吉備津彦命が当地生誕といわれ、吉備津彦命は記紀に西国平定の逸話を残す他、岡山県には部下の犬飼健らとともに温羅という土着の鬼を討滅したとの伝承が伝わる。前述の壺に入って流れてきた河勝の伝承と合わせて、田原本町では桃太郎伝

説発祥の地を発信している。

■太子伝承を伝える白山神社と杵築神社

法楽寺から筋違道を北北西に辿ると、伊邪那命を祀る白山神社（磯城郡三宅町屏風）に至る。太子が斑鳩から飛鳥へ通勤する途中で休息をとったとされる「腰掛石」や、愛馬・黒駒をつないだといわれる「駒つなぎの柳」等の伝説を残す。

筋違道を挟んだ向かいには、素戔嗚命を祀る杵築神社（同所）がある。近辺に点在する杵築神社と区別するため、地名を冠し屏風杵築神社とも呼ばれる。

村人が太子を接待する際、風よけとして屏風を立てたという地名起源説話が残っており、その様子を描いた「聖徳太子接待」絵馬も奉納されている。境内には、太子が休息の折、お付きの調子丸が地面を穿ち湧き出したという「屏風の清水」もある。

■筋違道の終端・法起寺

太子の飽波宮跡の推定地の一つ、飽波神社（生駒郡安堵町東安堵）のすぐ前を筋違道は横切り、



桃太郎生誕の地を伝える法楽寺境内の看板（田原本町黒田）（左）



太子道に面して建つ飽波神社（安堵町東安堵）（右）

斑鳩町へと入る。

『書記』によれば、推古天皇9(601)年、太子は斑鳩宮を営み、605年に移り住んだ。斑鳩は、政治的・経済的に極めて重要な地であった。なぜなら、奈良盆地一帯に広がる大和川各支流が斑鳩で合流しており、飛鳥から船で難波に出る際は必ずここを通るためである。この地と飛鳥を直線的に結ぶ筋違道がわざわざ敷かれたのも肯ける。

筋違道の終端はこの先、現在の法起寺(生駒郡斑鳩町岡本)付近と考えられている。『書紀』には推古天皇14(606)年、太子が推古天皇のために岡本宮で法華経を講じたという記事があり、法起寺境内から岡本宮と考えられる遺構が発見されている。

■太子との関わり深い法隆寺

さて太子の講説を大変喜んだ推古天皇は、水田100町を下賜し、太子はそれを斑鳩寺に納めたという。ここでいう斑鳩寺とは、現在の法隆寺(斑鳩町法隆寺)と考えられる。

法隆寺の由来を記した『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、推古天皇15(607)年に、太子が同寺と本尊の薬師如来を造らせたという。

『書紀』によれば、推古天皇29(621)年2月5日、太子は斑鳩宮で薨去した。亡骸は磯長陵(現叡福寺、大阪府南河内郡太子町太子)に葬られ、その道は太子葬送の道として知られる。

法隆寺金堂の釈迦三尊像は、太子の菩提を弔うため造られた。像の光背(後光を表現した装飾)には、造仏の由来と「上宮法皇」、すなわち太子のことが詳細に記されている。太子の没年を法興32(622)年2月22日と伝えるなど、『書紀』と異なる記述も見られる。

また中宮寺(斑鳩町法隆寺北)所蔵の天寿国繡帳は、太子を偲び、極楽浄土での太子の様子を想像して後の橘大郎女が采女らに刺繍させたものである。すでに大部分が破損して失われ、中宮寺に展示されているのはレプリカであるが、わずかに残った飛鳥時代当時の断片は奈良国立博物

館(奈良市登大路町)に寄託され、千年以上の時を経た現在もなお、鮮やかな色彩を保っている。

■太子没後の伝説

太子の死後100年以上も経った天平11(739)年、太子を偲ぶ廟として造営された建物が、法隆寺夢殿である。太子の現身と伝えられる本尊の救世観音菩薩像は、かつて法隆寺僧の誰もその像を目にしたことのない「絶対秘仏」であった。

封印が解かれたのは明治時代、廃仏毀釈(仏教破壊運動)の嵐吹き荒れた後の1884年のこと。東洋美術史家のアメリカ人・フェノロサが文化財調査のため法隆寺を訪れた。法隆寺側との長い押し問答の末、フェノロサが秘仏の扉を半ば強引に開けた時、僧はみな逃げ出した。封印を解けば仏罰が下り、伽藍が崩壊すると信じられていたのである。

仏門興隆の多大な功績に加え、一族滅亡という悲劇も相まって、太子を巡っては虚実入り混じった様々な伝承が残され、太子信仰を生むこととなった。伝説のいくつかを掲載する『書紀』編纂者もまた、初期の太子信仰の影響下にあったと見られる一方で、それら伝承の核には、確かに太子の政治権力と仏教信仰を認めることができる。

筋違道沿道に残る太子伝説は、その真偽は定かでないとしても、後世の人々が太子に寄せる敬慕の表れであり、伝説が沿道の風景をより鮮やかに彩っていることに異論はないだろう。(筋違道編終わり) (太田宜志)

